

自然誌 だぶり 冬

Natural history

三重自然誌の会情報誌 87号

2011年 3月

モンゴリナラが三重県にも自生

モンゴリナラは、名前のとおりモンゴルから朝鮮半島にかけて分布し、日本でも北海道や関東の一部および東海地方によく似た型が見られます。葉は倒卵形で鋸歯が大きく、葉柄が2～4mmと短く、日本の温帯に広く分布するミズナラと極めて似ていますが、樹皮やどんぐりの大きさ、殻斗の形は大きく異なります。最近の遺伝的な研究によると、大陸のモンゴリナラとは別の種類で、国内に分布するミズナラから分化したものであることが示唆されたため、「フモトミズナラ」という名称が提唱されています。これまで、三重県内における記録はありませんでしたが、桑名市の丘陵地で生育しているのを確認したので報告します。確認したモンゴリナラは2本の高木と数本の幼樹で、付近を探し回りましたが今のところ同市五反田地内の丘陵地でのみ生育しています。ここには、三重県レッドデータブック2005で絶滅危惧ⅠA類（最高ランク）に選定されているウンヌケも生育しており、生物多様性保全上とても重要な場所です。しかしながら、県道142号に面しているため商業施設も多く、生育地の一部は削り取られて飲食店となり、また、造成されて墓地になったりしています。希少植物といえば湿地をイメージしがちですが、このように乾燥してやせた土地だけに生育する植物もいることをあらためて思い知らされました。モンゴリナラの黄緑色の新葉は遠くからでも目立ちますので、春になったら再度探してみようと計画しています。また、モンゴリナラに関する情報をお持ちの方がお見えでしたらぜひお教え下さい。



A



C



B



D

写真 A：生育地（中央がモンゴリナラ）。 B：モンゴリナラ，樹高約15m。 C：樹幹（周径約1m）。
D：葉 15cm×20cm，波状きよ歯

〈大谷勝治：東員町城山2-26-27〉

三重県産直翅目のタイプ標本

河 北 均

動植物の新種が発見されて研究者が新種記載論文として、発表されるとき、基準となる標本を指定します。新種記載の論文を原記載と言いますが、動物は国際動物命名規約、植物は国際植物命名規約、細菌類は国際細菌命名規約に、それぞれの規約に従ったかたちで新種記載されます。各規約は細部において、若干の相違点はありますが、リンネの命名法に準じており、基本的には同じです。

新種として記載される基準となる標本をホロタイプ (holotype) と言い、学名を代表する絶対的な唯一の標本となります。原記載においてホロタイプのほかに複数の標本をパラタイプ (paratype) として指定します。パラタイプのうちホロタイプとは異なる性別である個体の標本をアロタイプ (allotype) として指定できます。通常は原記載に複数の標本を使い、♂1個体をホロタイプ、♀1個体をアロタイプ、その他数個体をパラタイプに指定するのが、一般的です。こうした一連のタイプシリーズと呼びます。欧米の研究機関では、タイプシリーズの標本を多数所蔵することは高く評価されるそうです。残念ながら、学術後進国の日本では、タイプシリーズの標本が研究機関の多く保管されていても評価されないようです。タイプ標本を含む蛾類の井上 寛コレクション、一色周知コレクションも国外の研究機関に流出しました。流出について、一般のマスコミなどに話題になることはありませんでした。一般の日本人の学術に関する意識の低さがこれを見ても分かるかと思います。

タイプ標本の重要性について、一例をあげます。実話ですが、実名等をあげるのは差し障りがあると思いますので、関係者の名前、昆虫の種名は割愛しました。アマチュアの昆虫研究者が昆虫の新種の記載をしました。この論文を読んだプロの昆虫研究者が新種であるならば、新種の根拠となった近縁種の前記載を見るだけでなく、ロンドンの大英博物館所蔵の近縁種のタイプ標本を調べて相違点を識別したうえで新種記載の論文を発表するべきだと激しく非難しました。当時、一般の日本人が海外へほとんど行けない時代に、アマチュアの昆虫研究者に対して、ロンドンに行って来いと恫喝した昆虫分類学の権威の研究者にも問題があるとは思いますが、タイプ標本の重要性を指摘しているという点においては、一理あるのではないしょうか。

タイプ標本が如何に重要であるかと言うことを述べてきました。また、タイプシリーズの標本を多数所蔵することは、学術先進国の欧米では高い評価を受けることを述べてきました。では、三重県の研究機関を代表する三重県立博物館では昆虫のタイプシリーズの標本はどれぐらいあるのでしょうか。同博物館の名誉のために、これは伏せておきましょう。しかしながら、新県立博物館の建設にあたっては、新種の標本に限らず、レッドリストの標本などの重要性は、収蔵資料の議論の対象となってもよいような気がしますが、県民を対象とした意見交換会などでもあまり議論されていなかったようです。

三重県を模式産地 (タイプ標本の産地) として発表された昆虫は130種以上ありますが、そのなかで直翅目のタイプシリーズの標本について、紹介しましょう。三重県の昆虫であるのに、知られざる以外な事実が分かります。

三重県産直翅目の新種が発表されたのは、1951年の大町文衛・松浦一郎両氏の「エンマコロギとその近似種について」が最初です (写真1および2)。この論文が発表される以前は、日本列島のエンマコロギの学名は混乱し



写真1 エンマコロギの原記載

ており、普通種エンマコロギでさえ、3つの学名が入り乱れ、国内では松村松年、素木得一、国外では、Walker, Burmeister, Saussure, Karny, Chopardの諸大家の諸説は様々でした。当時としては画期的なこの論文によって、日本列島のエンマコロギ類の整理がなされました。従来混乱していたエンマコロギは *Gryllus emma* として新種記載、新たにタイワンエンマコロギ *Gryllus taiwanemma*、エゾエンマコロギ *Gryllus yezoemma* の2新種の記載、あわせてエゾエンマコロギの変種カラ



写真2 エンマコロギ(津市白山町「四季のさと」)

エンマコロギ *Gryllus yezoemma* var. *kawara* が記載されました。このうち、三重県に関係するのは、エンマコロギとタイワンエンマコロギですが、惜しいことに同論文の中でタイプ標本の指定はされませんでした。現在では、タイプ指定は必須ですが、この時代は必ずしも厳密ではなかったようです。同論文のなかでは、新種記載のサンプル標本として、エンマコロギは津産の1♂1♀、東京産の1♂1♀、タイワンエンマコロギは木本（熊野市木本）産の2♂2♀の形態について詳しい記述がなされています。同論文のなかで、ホロタイプの指定がされていないので、原記載論文中で引用された標本はすべてシントタイプ (syntype) となります。シントタイプはホロタイプと同じ価値を持つ標本とみなされるわけです。これらの標本の一部は、大町文衛氏から上島法博氏に引き継がれ、松阪大学に保管されていました。2001年に大町コレクションが松阪大学から大阪市立自然史博物館に移管されるにあたって、市川顕彦氏はエンマコロギをシントタイプの中から津産の1♂をレクトタイプ (lectotype) として指定しました。レクトタイプとは原記載でホロタイプが指定されなかった場合、新たに選び直した標本のことでシントタイプなどから指定できます。従って、この標本がエンマコロギの学名の基準標本となります。エンマコロギは北海道、本州、四国、九州で最も普通に生息しており、誰でも知っている種ですが、学名の基準となるタイプ標本の産地が三重県津市である事実はほとんど知られていません。なお、エンマコロギの学名ですが、1961年に Chopard が *Teleogryllus* 属を記載し、エンマコロギ類はこの属に入れられ、現在は *Teleogryllus emma* になっています。

タイワンエンマコロギは熊野市木本産の2♂2♀がシントタイプになったのですが、2001年に市川顕彦氏らは *Teleogryllus taiwanemma* を1839年に Audinet - Serville が記載した *Teleogryllus occipitalis* のシノニム (synonym) ー同タイプ異名ーであるとし、それに伴い、*taiwanemma* が新参シノニムになり無効名となったので、レクトタイプの指定はなされませんでした。

その後、日本の直翅目の分類の研究が停滞したこともあり、三重県産直翅目の新種が発表されるのは、1980年代以降になります。1984年に加納康嗣氏と私によってヒトコブハダカササキリモドキ *Tettigoniopsis kongozanensis* が新種記載されました。パラタイプに藤原岳、御在所岳、野登山の標本が指定されています。

1988年には長年の懸案だった日本のオカメコロギ種群4種の分類上の整理が松浦一郎氏によってなされ、2新種が記載されました。大山田村のモリオカメコロギ *Loxoblemmus sylvestris* がパラタイプに指定されています。この記載論文は三重県にも縁の深かった松浦一郎氏の遺稿となりました。

1996年に富永 修、S. Y. Storozhenko の両氏によって、ヤマトフキバツタ *Parapodisma yamato* が新種記載されました。三重県関係では、上野市、名張市、大山田村、青山町、白山町、美杉村、伊勢市、鳥羽市、大台町、宮川村の標本がパラタイプに指定されました。しかし、本種は2006年にセトウチフキバツタ *Parapodisma setouchiensis* の新参シノニムになり、現在ではヤマトフキバツタの和名だけ残し、*Parapodisma setouchiensis* の学名が充てられています。

1999年には加納康嗣氏を中心に日本の短翅型ササキリモドキ類のモノグラフがまとめられ、その中で加納康嗣氏がキンヒメササキリモドキ属 *Kinkiconocephalopsis* を記載し、私が同属のスズカササキリモドキ *Kinkiconocephalopsis matsuurai* を記載しました。ホロタイプ、アロタイプ、パラタイプに野登山の標本を指定しました。

従来 キンヒバリ *Natula pallidula* とされていたものが、じつはカヤヒバリ *Natula pallidula* に充てるべき学名であり、2001年に杉本雅志氏によって、キンヒバリ *Natula matsuurai* として新種記載されました。ホロタイプには伊勢市、パラタイプには伊勢市、名張市の標本が指定されています。また、2001年に市川顕彦氏が新種記載したキアシヒバリモドキ *Trigonidium japonicum* のパラタイプには、美杉村の標本が含まれています。

2003年には市川顕彦、杉本雅志の両氏によって、日本のカマドウマ類のモノグラフが発表されました。同論文の中でイセカマドウマ *Paratachycines isensis* が新種記載され、藤原町篠立の風穴産の標本がホロタイプに指定されています。

直翅目ではありませんが、2008年に市川顕彦、岡田正哉の両氏によって、新種記載された直翅系昆虫ナナフシ目のシラキトビナナフシ *Micadina fagi* のパラタイプには宮川村と藤原町の標本が指定されています。今まで述べてきた各種のタイプシリーズの標本のほとんどは大阪市立自然史博物館が所蔵しています。

三重県産直翅目のタイプシリーズについて、紹介しました。これは、三重県を模式産地として発表された新種の昆虫約130種の一部に過ぎません。タイプ標本の保管について、公共の研究機関の責務が重いことは言うまでもありません。また、タイプシリーズはもとより、いつ絶滅するか分からないレッドリストの標本の収集とその収蔵標本の管理は地方における公立博物館がその責務を負うべきものでしょう。

参考文献

- 市川顕彦. 2001. 松阪大学からのタイプ標本の移管について. *Tettigonia*, (3) : 16.
- Ichikawa, A. 2001. New specis of Japanese crickets (Orthoptera : Grylloidea) with notes on certain taxa. *Tettigonia*, (3) : 45-58.
- 市川顕彦・村井貴史・本田恵理. 2000. 総説・日本のコオロギ. ホシザキグリーン財団研究報告, (4) : 257-332.
- 市川顕彦ほか. 2006. バッタ・コオロギ・キリギリス大図鑑687pp. 北海道出版会.
- Ichikawa, A. & M. Okada. 2008. Reviw of Japanese specis *Micadina Redtenbacher* (Phasmatinae, Diapheromeridae), with description of a new specis. *Tettigonia*, (9) : 13-31.
- Kanô, Y. & H. Kawakita. 1984. Two new specis of the genus *Tettigoniopsis* (Orthoptera, Meconematinae) from Honshu and Shikoku, Japan. *New Entomol.*, 33 (4) : 1-13.
- 加納康嗣ほか. 1999. 日本の短翅ササキリモドキ類(直翅目, キリギリス科, ヒメツユムシ亜科). *Tettigonia*, 1 (2) : 1-81.
- 松浦一郎. 1988. 日本産オカメコオロギ属 (*Loxoblemmus* : Orthoptera) 近似種の種類. *New Entomol.*, 37 (1~4) : 17-23.
- 三重昆虫談話会. 1986. 三重県をタイプロカリティとする昆虫. 31pp.
- 大町文衛・松浦一郎. 1951. エンマコオロギとその近似種について. 三重大学農学部学術報告, (2) : 63-72.
- Sugimoto, M. 2001. Taxonomic study of Trigonidiinae (Orthoptera, Trigonidiidae) of the Ryukuys, SW Japan, with descriptions of two new specis. *Tettigonia*, (3) : 81-87.
- Sugimoto, M., & A. Ichikawa 2003. Reviw of Raphidophoridae (excluding Protrigrophilinae) (Orthoptera) of Japan *Tettigonia*, (5) : 1-48.
- Tominaga, O., S. Y. Storozhenko & Y. Kanô. 1996. Two new species and a subspecis of the genus *Parapodisma* (Orthoptera, Acrididae) from Japan. *Tettigonia*, 1 (1) : 1-23.

〈かわきた ひとし : 伊勢市岡本1丁目17-18〉

鈴鹿青少年の森湿地は残った

清水善吉

鈴鹿市といえば「サーキット」というくらい鈴鹿サーキットが有名ですが、そこに隣接して「青少年の森公園」という都市公園があります。都市公園ですので、植物等はかなり強い管理をされており、本来の植生はみられず、林床植物もきれいに刈り取られている場所がほとんどです。しかしながら、公園の一角に湧水のしみ出す湿地があり、そこは湿地故かほとんど人手が入らず、湿地植物の観察地として一部の人にはサーキットと同じくらい有名です。三重自然誌の会も、1995年に自然観察会の行事をこの場所で開催しており、その時にもたくさんのサギソウが咲いていた記憶があります。

ところが、2000年5月8日に湿地を訪れてびっくりしました。湿地の一番低い山裾に沿って幅・深さ1mほどの溝が掘られ、その中に側溝への排水口をつけてから碎石で埋め戻していました(写真1)。

公園担当者の方に工事の目的をお聞きすると、雨天時に公園の芝生内に水が流れ出して困るので、湿地の水はけを良くするために行ったとのことでした。一帯が開発されている中でこの場所が湿地植物にとっていかに重要か、また、シラタマホシクサやトウカイコモウセンゴケなどの周伊勢湾要素の遺存植物の貴重な残存地であることを説明したところ、ほとんど終わっていた工事を一旦ストップし、別の方法を検討してもらえことになり、とりあえず側溝への排水口は塞いでもらいました。

年があけて2001年1月から再び工事が始まり、溝の碎石は除去して土で埋め戻し、山裾をやや高くして貯水能力を高めるとともに、手前に浅い側溝をいれて雨天時にあふれ出た水だけを流し出すような構造になりました(写真2)。湿地も残して、雨天時の水はけも確保するこの計画を担当者の方に説明されたときに、よく思いつくものだと感心したのが昨日のこのようです。

その後、口を出すけれど手は出さないと言われそうなので(もちろんお金は出しません)、湿地をさらに良好な状態にもどす作業に着手しました。具体的には、毎年一回、湿地植物に影響の少ない冬季に、ボランティアを募って草刈りを行い、刈った草を湿地から運び出しました(写真3)。草刈りは、公園でも以前から行っていたようですが、運び出さなかったために湿地植物の発芽が抑制され、また、遷移も進行していました。私の勤務地が津市であった頃はこの作業を毎年行っていましたが、2006年に現在の職場(玉城町)に移ってからは途絶えていました。

今年度になって思うところがあり、春、久しぶりに湿地を訪ねてみました。湿地周辺には立派な柵が設置され、「植物採取禁止」や「マムシ注意」の看板も立てられて



写真1 排水工事施工直後の状態. 2000年5月8日



写真2 湿地保全も考慮した排水工事. 2001年1月23日



写真3 ボランティアによる除草作業. 2004年2月28日

いましたが、草がかなり茂った状態で、残念ながら草刈り整備はされていないようでした(写真4)。それでも、モウセンゴケ類などは確認できましたので、市川正人さんに植物の現況調査をお願いしたところ、表1のような結果をいただきました。また、本会会員で県土木技師の上田利彦さんの仲介で、再び草刈りをさせてもらえるように公園管理者をお願いし、1月31日に本会のボランティアと県担当者の方々と作業を行いました(写真5)。



写真4 しばらく除草をしなかった状態。2010年5月29日

なお、この湿地の面積は約1000㎡で、市川さん達の調査によると82種の植物が確認されました。この中には絶滅のおそれのある植物も多く、三重県レッドデータブック2005に掲載されている種は13種にもなります(表1)。その中には、ミズギクのように、現在、県内ではここだけで生育の確認できる種も含まれており、継続的な湿地環境の整備は不可欠です。また、都市公園法により植物の採取は禁止されていますが、不逞の輩がいるとも限りませんので、盗掘防止に監視カメラ等の設置も有効です。



写真5 除草後の湿地の様子と作業を行った面々。2011年1月31日

鈴鹿市には国指定天然記念物「金生水沼沢植物群落」がありますが、表1に示したように青少年の森湿地植物群落はそれに劣らない重要性があります。この場所は、幸いなことに県有地ですから天然記念物指定への障害も少ないと思われしますので、市および県の文化財担当部局は指定に向けた作業を進めてほしいと思います。現在は、思いつきのボランティアに頼っている環境整備ですが、法的な位置づけを強化することによって持続的なものになっていくことを期待しています。

最後になりましたが、市川正人さん、山脇和也さん、上田利彦さんおよび草刈り作業に参加された皆さんに感謝いたします。

表1 鈴鹿青少年の森湿地の植物(市川正人・山脇和也両氏による2010年調査)。

門・綱	科	和名	学名	6/30	7/13	7/31	8/31	備考
羊歯植物	トケ	スギナ	<i>Equisetum arvense</i> L.	○				
	ゼンマイ	ゼンマイ	<i>Osmunda japonica</i> Thunb.	○				
	ウラボシ	コシダ	<i>Dicranopteris linearis</i> Bernh	○				
		ウラボシ	<i>Gleichenia japonica</i> Spr.	○				
	コバノシカガマ	ワラビ	<i>Pteridium aquilinum</i> (L.) Kuhn var. <i>latiusculum</i> (Desv.) Und. ex Halle	○				
裸子植物	マツ	アカマツ	<i>Pinus densiflora</i> Sieb. et Zucc.	○				
被子植物 (双子葉)	カバノキ	オオバヤシヤブシ	<i>Alnus sieboldiana</i> Matsum.	○				
	ブナ	コナラ	<i>Quercus serrata</i> Thunb.	○				
	ツツジ	アオツツジ	<i>Cocculus orbiculatus</i> (L.) Forman	○				
	オトギリソウ	ヒメオトギリ	<i>Hypericum japonicum</i> Thunb.	○		○	○	
	モウセンゴケ	モウセンゴケ	<i>Drosera rotundifolia</i> L.	○				NT
		トウカイモウセンゴケ	<i>Drosera tokaiensis</i> (Komiya et C. Shibata) T. Nakamura et Ueda	○				NT
	コキリシタ	ノリウツギ	<i>Hydrangea paniculata</i> Sieb.	○				
	バラ	ミヤコバラ	<i>Rosa paniculigera</i> Makino ex Momiyama	○			○	
		ナガボノワレモコウ	<i>Sanguisorba tenuifolia</i> Fisch. ex Link	○		○	○	VU
	マメ	ヤマズソウ	<i>Kummerowia striata</i> (Thunb.) Schindler	○			○	
トウダイグサ	アカマカシ	<i>Mallotus japonicus</i> (Thunb.) Muell. -Arg.	○					
	ヒメハギ	<i>Polygala japonica</i> Houtt.	○					
	ウルシ	ヤマウルシ	<i>Rhus trichocarpa</i> Miq.	○				
	モチノキ	イヌツゲ	<i>Ilex crenata</i> Thunb.	○			○	
	クロウメモドキ	イソノキ	<i>Frangula crenata</i> (Sieb. et Zucc.) Miq.	○			○	
	ブドウ	エビヅル	<i>Vitis ficifolia</i> Bunge var. <i>lobata</i> (Regel) Nakai	○			○	

表 1 (続き).

門・綱	科	和名	学名	6/30	7/13	7/31	8/31	備考
		スミレ	アギ スミレ	<i>Viola verecunda</i> A. Gray var. <i>semilunaris</i> Maxim.	○			
		アカバナ	コマツヨイグサ	<i>Oenothera laciniata</i> Hill	○			
		アリノトウグサ	アリノトウグサ	<i>Haloragis micrantha</i> (Thunb.) R.Br.	○		○	
		セリ	ツボクサ	<i>Centella asiatica</i> (L.) Urban	○		○	
			オオチドメ	<i>Hydrocotyle ramiflora</i> Maxim.			○	
		ツツジ	シヤシヤンホ	<i>Vaccinium bracteatum</i> Thunb.	○			
		ハイノキ	クロバ イ	<i>Symplocos prunifolia</i> Sieb.et Zucc.	○		○	
		リンドウ	リンドウ	<i>Gentiana scabra</i> Bunge var. <i>buergeri</i> Maxim.	○			
			ホソバ リンドウ	<i>Gentiana scabra</i> Bunge var. <i>buergeri</i> Maxim. f. <i>stenophylla</i> (Hara) Ohwi	○		○	
			ハルリンドウ	<i>Gentiana thunbergii</i> (G. Don) Griseb.	○			NT
		アカネ	フタバ ムグラ	<i>Hedyotis diffusa</i> Willd.			○	
			ヘクソカズラ	<i>Paederia scandens</i> (Lour.) Merr.	○			
		ゴ マノハグサ	ヒメアリカアゼナ	<i>Lindernia anagallidea</i> Pennell			○	
		キツネノマゴ	キツネノマゴ	<i>Justicia procumbens</i> L.			○	
		タヌキモ	ミカキグサ	<i>Utricularia bifida</i> L.	○	○	○	
			ホザキノミカキグサ	<i>Utricularia caerulea</i> L.			○	
		キク	ブタクサ	<i>Ambrosia artemisiifolia</i> L.var. <i>elatior</i> (L.) Descurtilz	○			
			ヨモギ	<i>Artemisia princeps</i> Pampan.	○			
			サワシロギク	<i>Aster rugulosus</i> Maxim.	○	○	○	NT
			オオアレチノギク	<i>Conyza sumatrensis</i> Retz.			○	
			ヒメムカシヨモギ	<i>Erigeron canadensis</i> L.			○	
			ヒヨドリバナ	<i>Eupatorium chinense</i> L. var. <i>oppositifolium</i> (Koidz.) Murata et H. Koyama			○	
			ハハコグサ	<i>Gnaphalium affine</i> D. Don	○			
			チチコグサモドキ	<i>Gnaphalium pennsylvanicum</i> Willd.	○			
			ブクサ	<i>Hypochoeris radicata</i> L.			○	
			ミスギク	<i>Inula ciliaris</i> (Miq.) Maxim.			○	CR
			ニガナ	<i>Ixeris dentata</i> (Thunb.) Nakai	○			
			セイタカアワダチソウ	<i>Solidago altissima</i> L.	○			
被子植物	ユリ	ナギラン		<i>Aletris luteoviridis</i> (Maxim.) Franch.		○	○	
(単子葉)		ナガバミスギボウシ		<i>Hosta longissima</i> Honda	○			
		タカサゴユリ		<i>Lilium formosanum</i> Wall.			○	
		サルトリイバラ		<i>Smilax china</i> L.	○			
		イグサ	イグサ	<i>Juncus effusus</i> L. var. <i>decipiens</i> Buchen.	○			
			アオコウガイゼキショウ	<i>Juncus papillosus</i> Fr.et Sav.			○	
		ホシクサ	シラタマホシクサ	<i>Eriocaulon nudicuspe</i> Maxim.	○		○	EN
		イネ	ヒメコスカグサ	<i>Agrostis nipponensis</i> Honda	○			
			メリケンカルカヤ	<i>Andropogon virginicus</i> L.	○		○	
被子植物	イネ	トダシバ		<i>Arundinella hirta</i> (Thunb.) C. Tanaka	○			
(単子葉)		コバノソウ		<i>Briza maxima</i> L.	○			
		タイワンカモノハシ		<i>Ischaemum aristatum</i> L.	○	○	○	
		ススキ		<i>Miscanthus sinensis</i> Anderss.	○			
		ヌマガヤ		<i>Moliniopsis japonica</i> (Hack.) Hayata	○	○	○	
		シマスメノヒエ		<i>Paspalum dilatatum</i> Poir.		○		
		ケネササ		<i>Pleiblastus shibuyanensis</i> Makino ex Nakai forma <i>pubescens</i> (Makino) S. Suzuki	○			
		カヤツリグサ	タチスガ	<i>Carex maculata</i> Boott	○			
			ゴウウ	<i>Carex maximowiczii</i> Miq.	○			
			マメスガ	<i>Carex pudica</i> Honda	○			NT
			ヒメクサ	<i>Cyperus brevifolius</i> (Rottb.) Hassk. var. <i>leiolepis</i> (Fr. et Sav.) T. Koyama		○		
			コアゼガヤツリ	<i>Cyperus haspan</i> L.	○		○	
			ミカヅキグサ	<i>Rhynchospora alba</i> (L.) Vahl	○	○	○	VU
			イヌノハナヒゲ	<i>Rhynchospora chinensis</i> Nees et Meyen			○	
			イトイヌノハナヒゲ	<i>Rhynchospora faberi</i> C. B. Clarke	○	○	○	
			コイヌノハナヒゲ	<i>Rhynchospora fujiana</i> Makino	○	○	○	
			ホタルイ	<i>Scirpus juncooides</i> Roxb.			○	
			マネキンシジユガヤ	<i>Scleria rugosa</i> R.Br. var. <i>glabrescens</i> (Koidz.) Ohwi et T. Koyama	○		○	VU
			アブラガヤ	<i>Scirpus wichurae</i> Bocklr.	○		○	
			コシジユガヤ	<i>Scleria parvula</i> Steud.	○		○	NT
		ラン	サキノウ	<i>Habenaria radiata</i> (Thunb.) Spreng.	○	○	○	VU
			トキノウ	<i>Pogonia japonica</i> Reichb.fil.	○	○	○	VU
			ネジバナ	<i>Spiranthes sinensis</i> (Pers.) Ames var. <i>amoena</i> (M.-Bieberson) Hara	○			

CR：絶滅危惧 I A 類, EN：絶滅危惧 I B 類, VU：絶滅危惧 II 類, NT：準絶滅危惧

〈しみず ぜんきち：松阪市日丘町 1386-17〉

事務局から

○原稿募集

会報「自然誌だより」の原稿を募集しています。次号「春」の原稿締め切りは4月末日です。書き方等が分かりにくい場合は事務局までお問い合わせ下さい。また、会誌「三重自然誌」も年度内発行を目指していますので、こちらにもご投稿ください。

○会費納入をお願いします

本会の会費は前納制ですので、同封の振込み用紙で納入してください。未納分がある方はあわせてお願いします。また、退会される方はご一報ください。

○会誌「三重自然誌」の訂正

会誌第11号41頁のタイトル 菅島の淡水産底生動物類（誤）→答志島の淡水産底生動物類（正）

○寄贈図書を紹介

全国の機関から以下のように図書が本会に寄贈されています。

釧路市立博物館紀要第32輯（2008）～ 同館（北海道釧路市）

長岡市立科学博物館研究報告第41号（2006）～ 同館（新潟県長岡市）

富山県中央植物園研究報告第6号（2001）～ 同植物園（富山県富山市）

のと海洋ふれあいセンター研究報告第2号（1996）～ 石川県環境部（石川県金沢市）

福井市自然史博物館研究報告第52号～ 同館（福井県福井市）

山梨県環境科学研究所研究報告第16号（2007）～ 同所（山梨県富士吉田市）

埼玉県環境科学国際センター報第6号（18） 同センター（埼玉県騎西町）

茨城県自然博物館研究報告第8号（2005）～ 同総合調査報告書（2007）～ 同館（茨城県坂東市）

神奈川自然誌資料27（2006）～ 神奈川県立生命の星・地球博物館（神奈川県小田原市）

川崎市青少年科学館紀要第14号（2003）～ 同館（神奈川県川崎市）

矢作川研究No.7（2003）～ 豊田市矢作川研究所（愛知県豊田市）

しのびぐも第25号（1997）～ 三重クモ談話会（三重県四日市市）

東洋蝙蝠研究所紀要第1号（2001）～ 特定非営利活動法人東洋蝙蝠研究所（奈良県奈良市）

多賀町文化財・自然誌調査報告書第3集（1993）～ 多賀町教育委員会（滋賀県多賀町）

和歌山県立自然館館報第23号（2005）～ 同館（和歌山県海南市）

岡山県自然保護センター研究報告第11号（2003）～ 同センター（岡山県和気町）

倉敷市立自然史博物館研究報告第23号（2008）～ 同館（岡山県倉敷市）

島根県立三瓶自然館研究報告第8号（2010）～ 同館（島根県太田市）

ホシザキグリーン財団研究報告第6号（2003）～ 同財団（島根県平田市）

昆虫関連団体雑誌年鑑2003～ フタオ会（鳥取県鳥取市）

比婆科学217号（2005）～ 比婆科学教育振興会（広島県庄原市）

比和科学博物館研究報告第46号（2006）～ 庄原市立比和自然科学博物館（広島県庄原市）

庄原市立比和自然科学博物館標本資料報告第6号（2006）～ 同博物館（広島県庄原市）

秋吉台科学博物館報告第41号（2006）～ 同館（山口県美弥市）

山口県の自然第70号（2010）～ 山口県立山口博物館（山口県山口市）

愛媛県総合科学博物館研究報告第1号（1996）～ 同館（愛媛県新居浜市）

福岡県保健環境研究所年報第32号（2004）～ 同所（福岡県太宰府市）

編 集 後 記

今号で紹介した寄贈図書は個人施設「浮里研究所」（松阪市柚原町）に置いています。市街地から車で30分以上かかりますし、常時人がいるわけではないので、利用していただくには不便です。なんとか改善できないかと思案しています。よいアイデアはありませんか（善）。

自然誌だより87号

発行日 2011年3月1日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail: mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp